平成30年度　武雄市立武雄中学校　学校評価結果

資料３－２

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
高い志と誇りを持ち、心豊かで輝く生徒の育成	①キャリア教育の一層の充実を図り、学ぶ意義を理解させる。 ②出番と役割を与え、承認する「開発的生徒指導」を実践する。 ③コミュニティ・スクールとして、家庭・地域との協働体制の充実を図る。 ④教職員が健康的に日々の業務に従事できる環境整備に努め、質の高い教育を実践する。

《達成度》
A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3　目標・評価

①キャリア教育の一層の充実を図り、学ぶ意義を理解させる。

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員から 評価	意見や提言など
教育活動	●学力向上	・学習意欲の喚起 ・指導法の工夫改善	①将来の目標や夢を持つ生徒を80ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。 ②ペアやグループでの話し合い活動などに取り組んでいると答えた生徒を85ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。 ③毎日の家庭学習を1時間以上勉強する生徒を70ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。	・キャリア教育の充実を図り、将来の夢や目標を持たせ、学ぶ意義を理解させる。 ・ペア、グループワークを取り入れた研究授業をしたり、互いに授業を見せ合ったりして力量を高める。 ・課題の与え方を工夫し、家庭学習の習慣化を図る。	C	▲将来の目標や夢をもっている生徒が70.2ﾎﾟｲﾝﾄ、将来の進路を意識して勉強に取り組んでいる生徒が53.9ﾎﾟｲﾝﾄで、ともに昨年を下回った。 〇一方、楽しく意欲的に取り組める分かりやすい授業であることへの生徒評価は70.1ﾎﾟｲﾝﾄと昨年を上回った。教師による指導事項の精選と指導方法の工夫は進んでいるものと考えられる。 ▲家庭学習１時間以上の生徒は目標の70ﾎﾟｲﾝﾄに達しておらず、昨年よりも2.5ﾎﾟｲﾝﾄ減少している。保護者も42ﾎﾟｲﾝﾄが１時間以上の家庭学習ができていないと答えている。 〇ただし、家庭学習の仕方や勉強のポイントについての教師の指導について評価している生徒が63.9ﾎﾟｲﾝﾄ、テスト前の勉強に対する努力ぶりを評価している保護者も65.4ﾎﾟｲﾝﾄと昨年より高くなった。これは、2学期中間考査に向けて試行したテスト・プレヴュー（プレテストを改称）の成果だと考える。	・生徒に将来の夢や目標をもたせる進路指導と学習意欲を喚起させることの繋がりを強めるように努める。 ・テスト・プレヴューが明確にしている、「 この問いが解けることは（こういった意義もあって） 特に重要である」「 実際のテストでは、このような形で出題される」ということについて、テスト直前だけのものでなく、もっと広いスパンにおける宿題として位置付けていきたい。 ・上記のような見通しをもって、最終的には定期考査に向かうテスト・プレヴューを、各教科で作成したいと考える。	C	・将来の夢や目標をしっかり持たせ、それを実現させるためには何を学ぶ必要があるのかを生徒自らが考え、実践していく環境を整える必要がある。職場体験や見学等のキャリア教育を行なってもらっていると思うので、それを更に充実し、体験後のふり返りや事前・事後学習を十分に時間をかけて行うことで、生徒自らが学ぼうと思えるような関わりを大切にしていって欲しい。 ・テスト・プレヴューを試行することで、生徒の定期考査に向かう意欲が高まっていると感じる。 ・一方、家庭学習時間の確保は、依然として上がっていない。この点からも学校側の目指す目的が、保護者に浸透していない事が一番の課題であると思う。目標達成に向けて、是非とも家庭・保護者との連携を、PTA上げて取り組んで頂きたい。
教育活動	◎教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	・ICTを利活用したわかる授業の実践	④ICT機器を授業に活かすことができる教職員を95ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。 ⑤ICT機器を使った授業をしていると答えた生徒を80ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。	・教職員のICT利活用研修会を年3回実施する。 ・ICT利活用した授業実践を校内で公開する。	B	・ICTに関する職員全体での利活用研修会は実施できなかったのは反省点である。しかし、スタディシリーズやPepperの活用について代表者による研修会を実施したので、今後の活用が期待できる。 〇ICTを利活用した授業をしていると答えた生徒は87.7ポイントであり、中間評価からさらに伸びて目標を達成した。多くの教師が、普段の授業でICTを利活用していることを示していると考えられる。	・各教室への電子黒板の常設を生かし、スタディシリーズやe-ライブラリの活用を推進する。 ・情報モラル教育の推進において、職員の負担軽減等を考慮し、『ネット社会の歩き方』等を活用した授業を進める。	B	・ICTの利活用については、先生方の反省より、生徒・保護者の評価が高く、先生方の取組の成果が現れていると判断でき、感謝する。 ・更なる改善として、先生方の研修時間の確保や、ICTを活用する事での業務削減と生徒との時間確保に繋げる事を目指して頂きたい。ICTを利活用した授業が普及し、全国的にもそれが一般的な学習形態となっている以上、教える側のICT教育での精通は必須であると思う。

②出番と役割を与え、承認する「開発的生徒指導」を実践する。

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員から 評価	意見や提言など
教育活動	●心の教育	・支持的風土づくりの醸成	⑥学校内外でのあいさつを推進する。 ⑦学級に居場所があると感じている生徒を85ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。 ⑧自分の役割や出番があると感じている生徒を70ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。 ⑨各学校行事に学級が団結し、達成感を味わう生徒を90ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。 ⑩人権教育、道徳教育の充実を図る。	・挨拶の重要性を理解させるとともに教師自ら率先して挨拶を行う。また、機会捉え、地域住民の声を生徒に届ける。 ・構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニングなど実態に応じて計画的に行い、よりよい人間関係づくりに努める。 ・学級・学年・生徒会活動等さまざまな場面において、生徒に役割と出番を与え、承認する場を作り出す。 ・帰りの会等で、他人を思いやる心など豊かな人間性を育む話をする。 ・人権集会や平和集会等を充実させるとともに、生徒の人権を尊重した指導に常に心がける。	B	・自らあいさつをしている生徒は80ﾎﾟｲﾝﾄ以上であり、学校来訪者や地域からも同様の声が聞かれる。しかし、保護者、教師はともに70ﾎﾟｲﾝﾄに達していない。 〇学級に居場所があると感じている生徒は84.4ﾎﾟｲﾝﾄであり、ほぼ目標を達成した。 〇自分の役割や出番があると感じている生徒は68.2ﾎﾟｲﾝﾄであり、目標に近づく結果となっている。 ▲学校行事で団結し、達成感を味わった生徒は80ﾎﾟｲﾝﾄであり、目標には達しなかったが、生徒会や学年を中心に生徒主体の行事の運営を計画的に実施するなど開発的生徒指導に努めた。 ▲学校行事や体験活動と関連した題材を取り上げ、道徳的価値について考えさせる授業を設定した。「私たちの道徳」の活用は不十分であった。 〇「友達は優しく接してくれる」（+3.0）「友達への思いやりのある言動」（+2.6）「相談する友達、家族や先生がいる」（+4.5）と感じる生徒が昨年より増えた。	・あいさつ・返事・言葉使いについてはその意義についての指導も行う。 ・より良い人間関係づくりに役立つ資料等を共有し、授業等を全体で計画的に実施する。 ・役割や出番の実感、行事の達成感を高めるために、今後も生徒自身が目的・目標・活動内容・役割分担などを自ら考えたり、集団で共有したうえで実行したりしていく場の設定を継続して行う。また、行事後には必ず振り返りを行い、自分や友達の良さを確認するようにする。 .・道徳教育に関するポスターや資料の掲示コーナーを設ける。 ・生徒会や教科の掲示物については、掲示場所や内容を精選し、定期的に新しいものに変えていく必要がある。また、年間計画を作成し、継続的に取り組む必要がある。 ・人権教育を年間指導計画に沿って、計画的・組織的に実施する。	B	・コミュニケーションが希薄になりつつある現代において、ネットではないリアルな称賛・承認を直接目の前で得られる事は、生徒にとって大きな財産となりうると思う。是非継続して取り組んで頂きたい。 ・道徳の活用は、基本的に担任の先生方が主体となられると思うが、道徳による心の教育を担任のみに任せる事は、業務負荷になるだけと思う。道徳の授業に関しての教師の評価が50%を下回っており、授業法の迷いや教科としての評価判断の不明瞭さがあるのではないかと察する。管理者や市教委からの出来る限りのフォローをお願いしたい。
教育活動	●いじめ問題への対応	・いじめの予防、早期発見、早期対応の体制の充実	⑪月1回いじめアンケートを確実に実施し、いじめに迅速に対応する。 ⑫先生は、いじめや悩みがあれば早くきちんと対応してくれると答えた生徒を80ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。 ⑬「いじめ」の認知について、再度教職員の共通認識を図り、適切な支援・指導及び未然防止に全職員で取り組む。	・道徳の時間を充実し、人権意識を高めいじめを許さない生徒を育てる。 ・教育相談部会で気になる生徒の情報を共有する。 ・定期的な教育相談及び気になる生徒と必要に応じて個別面談を実施する。 ・いじめに対する職員研修会を開催し、いじめの具体的事例をあげ、該当するか否かの共通認識とその後の対応・処置等について全職員の共通理解を図る。	B	〇いじめの件数は、昨年度に比べ約半数に減った。（1月現在、覚知17件、認知9件）いじめアンケートや教育相談を通して早期対応や再発防止に努めたこと、各学級において、「いじめ防止プログラム」や、いじめについて考える教材を活用したいじめ防止に取り組んだことなどの成果であると考える。 ▲いじめへの迅速な対応については、生徒は74.1ﾎﾟｲﾝﾄであり目標に達していない。保護者も66.6ﾎﾟｲﾝﾄと低いが、教師は82.1ﾎﾟｲﾝﾄであった。	・いじめは誰でもいつでも起こり得るという危機感を持って指導にあたり、今後も、臨場指導や生徒とかかわることに努める。また、問題発生後は被害者を第一に考え、加害者の反省、保護者への説明を的確に行う。これが、生徒や保護者の意識向上につながると考える。 ・「いじめ防止プログラム」等、予防・開発的な教育について、学年間で教材や資料を共有したり、情報交換をしたりする。	B	・いじめは何時でも起こりうるという危機感を持ち、定期的に調査が実施されることで教師、生徒ともにいじめに関しての意識が薄れることなく定着してきている。 ・また、グループエンカウンターソーシャルスキルトレーニングを通し生徒自身のいじめに対する心の成長を促していると察するとともに評価できる。 ・学校は、いじめられる子をなくすということはもちろん大事だが、それ以上にいじめる子をなくすという観点から指導にあたって欲しい。
教育活動	〇生徒指導	・組織的な生徒指導体制の充実	⑭生徒だけの活動をつくらない。 ⑮不登校の未然防止に努め、不登校生徒を4%以下にする。 ⑯発達障害を持つ生徒やインクルーシブ教育に全教職員が研修を深め、支援体制の充実を図る。	・すべての教育活動において、早めの臨場指導を心がけ、生徒と関わる時間を確保する。 ・保健室来室者や欠席者、気になる生徒を全職員で把握し、対応する体制を強化し、予防や早期発見に努める。 ・気になる生徒に対して、初期の段階で問題解決を図り、深刻な問題へ発展しないように組織的に早期対応を行う。 ・特別支援教育に係る職員研修の充実を図る。 ・個々に応じた「支援計画・指導計画」を作成し、計画的に指導に取り組む。	A	〇喫煙・授業さぼり等の問題行動が全くなかった。また、地域からの通報や苦情も非常に少なかった。教師が早めの臨場指導を心がけ生徒達だけの活動を作らないように努めたこと、開発的生徒指導を継続している成果と考える。ただ、SNSがらみのトラブルが増加したため、情報モラル教育講座（10月）を開催したり、SNSの適切な利用について学級指導（12月）をしたりした。生徒アンケートから「スマートフォンのルールがない」「ルールがあっても守っていない」生徒が40%もいることが心配である。 〇不登校生徒の出現率は3.48%であり、目標を達成した。 ・全体での個別の支援計画、指導計画の見直しの時間は確保できなかったが、対応が必要と思われる生徒については、発達検査や面談につなげることができ、今後の見通しをもつことができた。	・今後も担任だけでなく、全職員で諸活動に対して早めの臨場指導を行い、問題行動の未然防止に努めると共に生徒とかかわる時間を確保する。 ・SNSの利用やトラブルについて、生徒への指導はもとより、保護者への説明やPTAの「わが家のルール」づくりの推進が急務である。 ・不登校の兆しがある生徒にはカウンセリングを行ったり、別室対応を柔軟に行ったりすることで欠席をしないようにする。 ・個別の対応が必要な生徒については、年度終わりに必ずまとめておき、年度当初の引き継ぎを確実に行う。 ・職員会議、学年会で支援の必要な生徒について定期的に報告を行い、情報を共有する。	A	・先生方による地道な努力により、問題行動が大きく減少していることは高く評価できる。これからも臨場指導や開発的生徒指導を強力に推進して早め早めの対応をお願いしたい。 ・早い段階から複数体制での対応が図られ、継続的に取り組まれた結果が反映された素晴らしい実績と思う。 ・一方、スマホ含めたSNSのトラブル等については、家庭でのルール作りや保護者の監督意識の希薄さが、アンケート結果からうかがえる。市連Pでの従来の決議（携帯は持たせない）を再度PTAとしても取り上げ、早急な「我が家のルール」つくりに取り組んで頂きたい。

③コミュニティ・スクールとして、家庭・地域との協働体制の充実を図る。								学校関係者評価委員から	
領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策	評価	意見や提言など
学校運営	〇家庭・地域との協働体制の充実	・地域とともにある学校づくりの充実	⑰地区行事に参加している生徒を60ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。 ⑱地域に支えられていると感じている生徒を80ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。	・地域学校協働本部「武中のちから」と生徒会の連携を推進する。 ・区長会と連携し、地区行事を把握する。部活動においても地区行事優先で参加させ、地域住民の指示のもと生徒に任せられる手伝いなど積極的に活動させる。	B	〇地域学校協働本部事業の読み聞かせや赤ちゃんとのふれあいは例年通り実施した。 ▲叶武部会がまだ開催されていない。（２月実施予定） ▲地域行事に参加している生徒が51.5ﾎﾟｲﾝﾄ、地域に支えられていると感じている生徒が75.1ポイントであり、ともに目標に達していない。一方、地域行事を優先して部活動指導をしている教師が92.2ﾎﾟｲﾝﾄ（昨年比+5.7）あることから部活動指導以外からのアプローチが必要であると思われる。 〇吹奏楽部や美術部、自発的ボランティアの生徒が地域の様々な行事に数多く参加し、演奏や作品を披露したり活動したりして地域活動に大いに貢献した。	・叶武部会は担当者が早めに計画し、生徒会担当や地域代表との調整を図った上で開催する必要がある。 ・公民館や区長会と連携して地域行事を確実に把握し、生徒の参加推進に生かす。また、地域行事や地域ボランティアの活動状況を学校だよりや学校ホームページを通じて発信する。	B	・学校からの生徒への働きかけや組織的な体制づくりはしっかりできているように感じる。地区内の行事に関しては、生徒たちが活動している姿も見られるが、個人間の意識の差が依然として感じられる。（保護者も同様） ・町民運動会・春まつり・町敬老会・社会福祉大会・市物産まつりなどへの協力には感謝している。 ・地域行事の把握は、年初に可能である為、学校の年間行事と共に並行して作成し、参加促進を目指す事が必要である。
学校運営	〇情報発信	・情報発信の充実	⑲月２回「学校だより」を発行し、情報を発信する。 ⑳学校は、生徒の情報を学校だよりやホームページ、学校伝言板等で知らせていると答えた保護者を80ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。	・ホームページのブログや学校伝言板のメール等で学校行事等生徒の様子をこまめに発信する。 ・ホームページのトップページやアップするコンテンツ等を見直す。	B	〇「学校だより」を月２回発行し、情報を発信した。 〇学校は生徒の情報を学校だよりやホームページ、学校伝言板等で知らせていると答えた保護者は81.9ポイントであり、目標を達成した。 ▲学級だよりや学年だよりについては、中間評価以降も大きな改善がみられず、保護者に学校のようすを十分に伝えられなかった。	・ホームページの内容を精査し、部活動や生徒会活動などの活躍等を発信していくとともに、計画的にホームページの更新を行っていく。 ・学級によって学級だよりの発行状況に偏りがないようにするため、発行頻度を調査する。また、生徒の良いところを積極的に紹介するように奨励する。	B	・ホームページや学校便りなど、全体的な情報発信は非常に良くなされていると思う。一方、学級や学年レベルでの情報発信については担当職員の業務負担もあり難しい面もあると思うが、より生徒の学校生活の様子が伝わる手段になると思うので、できる範囲で発行していただくようお願いしたい。

④教職員が健康的に日々の業務に従事できる環境整備に努め、質の高い教育を実践する。								学校関係者評価委員から	
領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策	評価	意見や提言など
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	・長時間労働の解消	㉑勤務時間を意識して効率的に仕事をしたと答えた職員を85ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。 ㉒定時退勤日の実施を徹底し、定時退勤日には5時30分に退勤したと答えた職員を80ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。	・各教職員は業績評価表（自己目標申告書）に勤務時間を意識した働き方についての目標、方策を設定し、それを実行し評価を行う。管理職は業務記録票やヒアリング等をもとにそれを指導し、職場全体の業務改善を推進する。 ・月曜日を定時退勤日、金曜日を準定時退勤日とし、それぞれ5時30分、7時退勤を徹底する。	C	▲限られた時間の中で効率的に仕事をするように努めたと答えた職員が66.7ﾎﾟｲﾝﾄであり、職員個々の意識レベルでの業務改善はあまり進んでいないと考えられる。 ▲タイムカードの導入後、ほとんどの職員が忘れずに打刻し正確な勤務時間を自ら把握するようになった。後半は定時退勤日の呼びかけを強化したが、定時退勤日は5時30分に退勤したが中間評価より更に下回った。（39.8→36.6）	・職員個々が業績評価の自己目標に掲げていることを行動化するような取組を行う。（組織全体での業務・行事の見直し、ヒアリングの充実、職員研修での取扱い等） ・組織一斉の定時退勤日に変えて、各職員が自分で定時退勤する日（TKデー）を新たに設け、週1回はとにかく帰るように1月から取り組んでいる。	C	・早く帰れと言われるがやることは残っており、職員数は限られている。このような現状をどう解消するかは基本的には学校の問題と言うより行政側の責任が大きいと考える。教師の増員や業務の軽減、業務の分担など教育委員会との連携も必要。 ・組織一斉の定時退勤はなかなか難しいと思うので、職員個々の都合で定時退勤を促すTKデーの導入は良い。全職員が必ず実践することが継続のカギだと思う。
		・より適正な部活動運営	㉓顧問は部活動練習計画を毎月作成し、休養日を適切に設定し実施する。	・毎月第３日曜日は「県下一斉部活動休養日」とし、部活動を実施しない。 ・休養日を適切に設定し、活動と休養のバランスを図った部活動運営を徹底する。	A	〇第３日曜日の「県下一斉部活動休養日」は、大会参加等やむを得ない場合以外は完全に実施した。 〇県や市の「部活動基本方針」策定に伴い、部活動実績報告書の修正等、４月からの本格実施に向けた準備を早めに行った。 ▲後半、職員による下校指導を強化し、生徒の下校完了時間厳守の意識は高まってきた。しかし、全ての職員・生徒の意識のレベルまでには至っていない。	・４月から県や市の「部活動基本方針」が施行されるため、休養日の設定等これに沿った部活動の運営を、管理職・部活動担当者で共通理解のうえ組織的に推進する。 ・下校完了時間厳守の気運が高まりつつある。生徒の安全な登下校を確保するために下校指導を継続する。	A	・働き方改革に直結する部活動、県下一斉部活動休養日のように、組織全体で取り組み方を決めなければ、改善に繋がらない為、上記同様、対策の実行を願う。 ・部活動の時間だけ減るのは単純に疑問に感じる面もある。
		・健康管理体制の充実	㉔超過勤務時間の平均が80時間を超えないようにセルフケア及びラインケアに取り組む。 ㉕健康管理体制の充実に向けた職員研修を実施する。	・衛生委員会を月１回実施する。 ・中体連終了後、６か月以上の超過勤務時間の平均が80時間を超えた職員については産業医による面談を実施する。	B	・衛生委員会を月１回実施し、運営委員の中で業務記録票のデータを元に自発的時間外勤務の実態を共通理解し、改善策を協議した。しかし、有効な手立てを講ずるまでには至らなかった。	・月１回の衛生委員会を継続し、運営委員レベルで業務改善や働き方改革について具体的な協議を行う。 ・職員研修等で職員個々が勤務時間意識を高め、組織的な業務改善の具体的取組について考える機会を設ける。	B	・健康管理体制の充実に向けての管理者側の取り組みは大いに評価できるが、実際の効果は不明である。 ・職員数を増やし、分業を進めていくことが最善だと考えるが、現状では業務の効率化や付き合い残業廃止等の業務の思い切った見直しが必要であると感じる。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目								学校関係者評価委員から	
領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策	評価	意見や提言など
教育活動	●健康・体つくり	・望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	㉖給食を感謝して味わわせる。マナーを守って給食をいただき、感謝して残さず食べている生徒を85ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。 ㉗家庭と協働した食習慣を支援する。 ㉘早寝、早起き、朝ごはんの推進を図る。睡眠時間を6時間以上取れている生徒を65ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。	・全職員が4校時終了後5分以内に教室に向かい、準備や配膳・後片付けがスムーズに進むように指導する。 ・生徒に食生活の大切さを伝えるため、個別や部活動単位での食事指導を行い、食についての意識向上を図る。 ・食に関する授業や給食便りの発行を行う。 ・睡眠の大切さを伝え、睡眠時間を6時間以上取ることを目安として健康増進を図る。	A	〇マナーを守って給食をいただき、感謝して残さず食べている生徒は90ﾎﾟｲﾝﾄであり、目標を大きく上回った。学年や学級の取組もあり、給食の準備時間を短縮し残さず食べる生徒はどの学年も増えた。 しかし、食に対する感謝が不十分なところも見られた。 〇睡眠時間を6時間以上取れている生徒は81.7ポイントであり、目標を達成した。しかし、保健室来室者の実態からはそうでない生徒も見られる。今後も生活習慣の見直しと改善を行い、睡眠時間についての継続指導が必要である。 〇食育や保健指導について、時宜を得た内容の通信を月１回必ず発行し、情報発信に努めた。	・つぎ残しのないよう、学年職員を中心に指導し、食の大切さを伝え、臨場指導を継続して行う。 ・給食便りや保健便り等で、早寝・早起き・朝ご飯の大切さについて知らせ、生徒や保護者に対し意識の向上を図る。 ・養護教諭と栄養教諭の連携を図り、部活ごとの食育健康教育を継続的に行い、心身の健康について支援を行う。	A	・食育が社会的に広く浸透し、正しい食生活が心の健康につながることが認められてきた。武中においてもその意識が定着し、望ましい食習慣と心の健康、体づくりへの取り組みに現れていると評価できる。 ・これからは、スマホの利用率の上昇とともに睡眠時間の減少に伴う体調の悪化が予想される。そこは各家庭のスマホ使用のルールの作成、遵守を保護者にもお願いしたい。
学校運営	〇危機の未然防止	・安全・安心な生活環境の確保	㉙学校は、安全して過ごせる学校だと実感できる生徒を80ﾎﾟｲﾝﾄ以上にする。	・毎月の安全点検を確実に実施し、避難訓練・交通安全教室等計画的に行い、生徒・教職員の安全の確保、事故防止に対する意識を高める。 ・登校時における交通指導を毎日行い、交通事故防止に努める。	B	〇学校は、安心して過ごせる学校だと実感できる生徒は76.2ﾎﾟｲﾝﾄであり、目標には達していない。しかし、昨年度と比べると、4.7ﾎﾟｲﾝﾄ上がっており、改善傾向にあると考える。 ・避難訓練等を通じて、教職員の危機管理意識を高めることができた。一方で、経路の確認だけにとどまり、関係機関との連絡体制の確認や人員点呼の方法に課題が残った。 〇管理職が毎朝登校指導をしたり、部活動顧問が下校指導をしたりして、生徒の安全な登下校や交通事故の未然防止に努めることができた。	・より効果的な指導や訓練を実施し、安全指導の充実に努める。 ・避難訓練には関係機関（警察署、消防署など）とも連携し、生徒だけではなく職員の動きに対しても専門的な指導を受けるようにする。 ・安全な登下校を確保するため、生徒が日没までには帰宅するよう下校指導を徹底する。	B	・日常の安全に大きく関わる登下校時の交通安全指導が適切に行なわれていることは評価できる。生徒の命に関わることなので、これからも継続して指導を行なっていただくようお願いしたい。 ・今後も校内及び通学路等における危険箇所の再確認と同時に、学校・家庭・生徒ともにその情報を共有し、事故防止に努めて頂きたい。 ・左記の改善策・向上策にもあるように、関係機関との専門的見解を踏まえた避難訓練の実践等を宜しくご対応頂きたい。

4　本年度のまとめ・次年度の課題

本年度の学校評価は、具体的目標に「〇ポイント以上にする」という数値目標を多く設定した。より多くの職員が目標を意識して教育活動や学校運営に取り組み、検証の際に達成度を測りやすくすることがそのねらいであった。また、中間評価で特に課題であることが分かった項目について、年度後半から全職員で取り組んだ。（3つの重点取組）それは、①学力向上（生徒が家庭学習を1時間以上するよう努める、プレテストを2学期中間考査で5教科で実施する）、②定時退勤日の推進、③スマホの家庭でのルールづくりの推進である。12月の2回目のアンケートをもとに今年度の取組を検証した。本年度のまとめとしては、ICT利活用、支持的風土づくり、健康・体つくりでは大きな成果を挙げた。また、中間評価後の重点取組でも、テストプレビュー、TKデー、SNSについての講演会や学級指導については改善が進んだ。一方、家庭学習1時間以上、スマホの家庭でのルールづくりについては課題が浮き彫りになった。その後、学校運営協議会委員（地域代表、保護者代表）の皆様にさまざまな立場から学校関係者評価をしていただいた。学校や生徒、教職員、保護者に対する貴重な助言をいただいて完成した本年度の評価結果が上の一覧である。

本年度の評価結果を受けて、来年度に向けて次のような重点課題と取組（案）を決定した。①学力向上（12月調査で全教科県平均を上回る、テストプレビュー生かした日頃の家庭学習の底上げと1時間以上実施）、②生徒指導の充実（スマホ対策、早めの臨場指導の継続、生徒の出番を徹底的に仕組む、下校指導の強化）、③長時間労働の解消（TKデーの継続、適正な部活動運営）の3つである。本校は、ここ数年生徒指導面で落ち着いた状態である。これを支える臨場指導や開発的生徒指導等を継続しながら、生徒指導とともに学力向上でも成果を挙げられるよう学校評価を生かした学校運営や教育活動に努める。学校教育目標を実現し、地域から信頼される学校づくりを推進していきたい。

●は共通評価項目のうち必須項目、◎は共通評価項目のうち特定課題、〇は独自評価項目